

一心寺かわら版

第三十六号 平成二十八年一月発行

ホームページ・フェイスブックは「持名山一心寺」で検索を

謹んで新年のご挨拶を申し上げます

旧年中は当山護持にご協力いただき誠に有難うございました

みなさまがお念仏の中に生かされ、素晴らしい一年を過ごされますよう念じ上げます
本年もどうぞよろしくお願い申し上げます

南無阿弥陀仏

あたりまえが一番ありがたい

今年の柱掛け法語です。「あたりまえが何なのか、それが難しいんですよね」との声、確かに…。一九五〇年代後半には三種の神器といつて、白黒テレビ、冷蔵庫、洗濯機を持つことが憧れでした。一九六〇年代半ばには、カラーテレビ、クーラー、自動車それぞれ取って代わりました。今はあたりまえどころか、それでは不足。各部屋に大型テレビとエアコンがあり、車は一人一台、子どもでもスマートフォンを持つている時代。これがあたりまえならば、なんと贅沢なあたりまえなのでしょう。それでは「ありがたい」という気持ちには湧いてこないでしょう。

この法語は、「ありがたい」を正しく理解してこそ心に響いてきます。「ありがたい」とは「有り難い」、有ることが難しいということ。「ありがとう」は、ただ単に何かしてもらったことに対するお礼の言葉ではありません。あることが難しいことであるのに、尊いご縁により、今それがあることを喜び感謝する言葉です。



お釈迦さまは次のように説明されています。「大海の底に一匹の目の見えない亀がいて、百年に一度、波の上に浮かび上がる。その海に一つの穴がある一本の丸太が浮いている。百年に一度浮かぶこの亀が、ちょうどその丸太の穴に頭を入れることが一度でもあるだろうか。私たちが人間に生まれたということは、それよりも更に有ることが難しいことなのだ」と。

お笑い芸人・COWCOW（カウカウ）の「あたりまえ体操」を知っていますか。コミカルな動きをつけて、「あたりまえくあたりまえくあたりまえ体操。右足を出して左足出すとく歩ける」などと歌います。しかし、歩けることも、人間として生まれたことさえもあたりまえではない、有り難いことです。そこに「おかげさま」という気持ちが生まれます。具体的に、誰かに何かしてもらったということではない。けれども、すべてはご縁でつながり、今、私にはたらきかけてくださっている。それを知っていた先人は、「お元気ですか」と声をかけられると、「おかげさま」と応えてきました。みんなに、すべてに「おかげさま」と感謝し、喜んできたのです。

光を受けると陰ができません。しかし、光の方ばかり見ていると陰には気付きません。自分の足元を見た時に、振り返った時に初めて気付きます。すべてが有り難い、あたりまえのことなど何一つないという真実を伝えてくれるのが、この法語でしょう。



シリーズ・葬儀を考える② 積尊の臨終・葬儀

積尊にまつわる葬儀として、父・浄飯王（スッドーダナ）の臨終の話が伝わっています。積尊のもとにカピラ城から使者が来ます。浄飯王が自らの死期を予知し、息子に会いたいという知らせでした。積尊はカピラ城へ出向き、王を見舞い、宮中の人々に仏法を説きました。七日後、王は息を引き取りました。積尊は重臣たちと葬儀の準備を進めました。香水で遺体を洗い、絹の布で全身を覆い、棺に納めました。七つの宝石で荘厳したあと、棺を台座の上に安置し、真珠で編んだ網を巡らせました。そのあと華を四方に散らし、香を焚いて供養しました。棺を葬場に送る際、積尊は、弟、子、従弟と一緒に棺を担ぎました。その後、インド伝統の火葬によって葬られたといえます。

積尊自身は弟子・阿難（アーナンダ）に、「お前たちは私の遺骨の供養に関わるな。ブッダに浄らかな信を抱いている人々が遺骨の崇拜をなすであろう」と述べています。しかし、仏弟子たちは積尊の葬儀に関わることになりました。阿難は積尊に、どのような葬儀をしたら良いかと指示を仰いだところ、世界を支配する王である転輪聖王の葬儀を模範とするようにと答えられました。それは、まず遺体を新しい布で包み、それを打ちほごした綿で包み、また新しい布で包みます。そうして五百重に包んで鉄槽の中に入れ、さらにもう一重、鉄槽で覆います。あらゆる香料の薪を積み、火葬にします。そして四つ辻にストウーパを作って遺骨を納めるといふものです。

積尊は長い伝道生活を経て、身体の衰えを感じるようになります。最後の旅路で、純陀（チュンダ）の出した食事（一説にはキノコ料理）にあたって激しい苦痛に見舞われます。それでもクシナ

ラーを指す積尊、阿難に最後の水を飲ませてもらい、布施された金色の衣を身に着けます。そしてクシナーラーに到着、沙羅双樹のもとで頭を北に向けて横になり、ついに涅槃に入られました（下・涅槃図）。多くのものが嘆き悲しみました。人々は天幕を作り、多くの布の囲いをつけて、舞踊、歌謡、音楽、花輪、香料をもって供養しました。クシナーラーは町中マンダラー華がまき散らされていたといえます。そして七日後、ついに火葬することになりました。

阿難は、積尊から聞いていた葬儀の方法を人々に告げました。準備が整って火葬しようとしたが、火が点きません。弟子・迦葉（カッサパ）が到着していません。迦葉は、マンダラー華を持った一人の行者に出会い、積尊が亡くなったと聞かされます。ようやく事実を知り、五百人の僧とともに駆けつけました。彼らは衣を左肩だけにかけて直して、合掌して薪の周りを三度右回りし、積尊の足に頭をつけて礼拝しました。すると薪は自然と燃え上がったといえます。荼毘が終わると、人々は遺骨を安置して再び七日間、舞踊、歌謡、音楽、花輪、香料をもって供養しました。

積尊の入滅を知った諸国の王たちは、積尊の舍利を分けてほしいと願いました。舍利は八分の一ずつ各国に分配され、八つのストウーパが作られました。また、灰を納めたストウーパと遺骨を入れた瓶を納めたストウーパも作られました。それは積尊自身が阿難に次のように述べたことによります。



「四つ辻に修行完成者のストウーパを作るべきである。誰であろうとそこに花輪、香料、顔料をささげて礼拝し、また心を浄らかにして信ずる人々には長いあいだ利益と幸せが起るであろう：これは正しくさとりを開いた人のストウーパであると思つて、多くの人は心が浄まる。かれらはそこで心が浄まつて、死後に良いところに生まれる。この道理によつて正しくさとりを開いた人については、人々がかれのストウーパを作つてこれを拝むべきである」。

(サンチーのストウーパ)



現在、日本で行われている仏式葬儀に見られる習慣には、釈尊の涅槃直前の様子や葬儀を起源としているものが多くあります。仏教徒はさとりを開かれ、涅槃に入られた釈尊を尊敬し、同じような葬儀を勤めたいと願つてきたのでしよう。続きはまた次回に。

真宗教団連合香川県支部間法大会報告

十月十五日、綾歌アイレックスにて間法大会が開催されました。まずは、当山でも催された劇団音芽オリジナル仏教歌劇「正信」の公演。親鸞聖人の妻、恵信尼公の回想シーンで幕が開き、戦乱の世、聖人の出家と叡山での修行、六角堂での夢告、法然上人への入門、承元の法難、関東でのご教化、恵信尼さまとの別れなどが、躍動感あふれる踊りと歌によつて表現されました。

講演は筑波大学名誉教授・今井雅晴氏による「親鸞聖人のご家族への思い」。親鸞聖人は、六角堂の観音菩薩のお告げによつて結婚を決心された。熱心な念仏信仰を持つ三善家に生まれ、おそらく親

鸞聖人よりも早く法然上人の教えにふれていたのであろう恵信尼さま。二人は法然上人のもとで出会い、結婚された。親鸞聖人が越後に流され、またそののち関東へと向かわれたとき、恵信尼さまも同行された。その当時としてはあまりないこと。それは恵信尼さま自身の意志である。親鸞聖人と恵信尼さまは強い絆で結ばれていた。関東での布教においても、仲のよい家族の姿が非常に説得力をもつたと思われる。

親鸞聖人は、家族をととても大切にされていた。それは自らの体験が大きく影響していたのだろう。九歳で家族と切り離されて、恋しくないわけがない。そのご家族への思いは、『皇太子聖徳奉讃』にあらわされている。

救世観音大菩薩 聖徳皇と示現して

多々のごとくすてずして

阿摩のごとくにそひたまふ

「救世観音菩薩は聖徳太子の姿を取つて現われまして、お父さんのように子どもを捨てず、お母さんのようにそつと寄り添つて下さいます」という意味。「多々」は幼児語で「お父ちゃん」、「阿摩」は「お母ちゃん」のこと。親鸞聖人にとつて父親とは、しっかりと子どもを捨てることなく導く存在、母親とはやさしく寄り添う存在であった。そのように家族を大事にされた親鸞聖人だからこそ、そのご教化が人々の心に深く届いたのであろう、とのことでした。

お念仏によつて強い絆でつながった家族を作りたいものです。

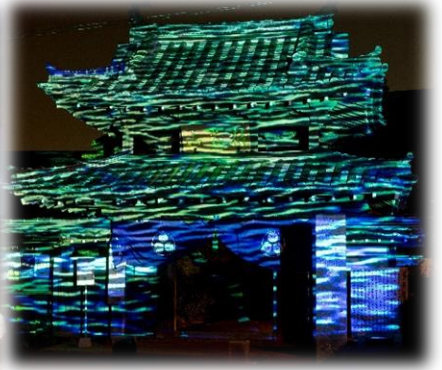


よるしるべ&よるしらべ報告

十月三十日～十一月八日に開催された「よるしるべ二〇一五」。今年は映像、灯り、香り、音、影、パフォーマンスに加えて、かまぼこ音楽堂でのライブ、とんしよキッチンでのグッズ販売、スタンプリーなど多くの楽しみを提供してくれました。

一心寺では、山門に有明浜の波の映像。様々な色に変わる波模様が幻想的でした(右下)。山門下にはうっとりする香りの札。参道の陶の灯りに導かれ本堂へ、本堂入口には様々な形の円光が広がる陶の大作(中下)。堂内に響く音楽は仏具と楽器が混在、念仏に合わせて奏でられるピアノ、なんとも不思議。最終日のかまぼこ音楽堂でのキジマサウンドシステムのライブでは、生で念仏と音楽が融合するという前進的な試み、出演者としても楽しませていただきました。

十一月三日には昨年好評を博した「よるしらべ」。よるのお寺、和蠟燭の灯りに照らされ輝く荘厳の中で声明と雅楽のしらべ。「三十二相」は現代風に言ううと管絃楽付き合唱曲、なかなか聞くことではできない天台声明の秘曲です。今年は無楽「還城楽」も公演(左下)。スポットライ



トに浮かび上がった舞人の姿に歓声が上がりました。四国新聞に掲載されるなど、大きな反響を呼んだ「よるしるべ&よるしらべ」、来年も楽しみです。

古澤巖奉納公演報告

十月二十日、古澤巖奉納公演。一九〇名の来場者で大盛況。特に印象的だったのはニューアルバム「愛のツイガーヌ」あなたを想い続けて」に収められている「マリーノのコンチェルト第二番」。躍動的な部分と情緒的な部分が混在する名曲、素晴らしい演奏でした。お待ちかねの「チャルダッシュ」は躍り出したくなるような軽快な演奏。最後は「愛の賛歌」でしっとり。トークは静かな語り口の中に笑いもあり、あつという間の一時間。手が届くほどの距離で世界の古澤巖氏の音を感じることできた最高に贅沢なひと時でした。鳴り止まない拍手がこの公演の素晴らしさを物語っていました。

秋季永代経報告

九月二十六日、秋季永代経並びに納骨堂勤行厳修。法話は初めてのご講師・宮武正司師(琴平町・大念寺)。明るく穏やかな人柄がにじみ出る語り口、やさしく仏の心を説いてくださいました。

誕生報告

十一月十三日、第二子が誕生しました。三二八二グラム元気な女の子です。一心寺の一員として、どうぞよろしくお願いいたします。

